

聖書:ルカの福音書1章24~38節

説教:私は主のはしためです

はじめに

待降節の第二週目を迎えております。その待降節の謂われについても一度確認しておきます。

神が、アブラハムを通して約束されたカナンの地はやがてイスラエルとして一つの国にまとめられていき、一時は全世界がうらやむほどの繁栄し国になる。ところがいつまでも続かない。結局滅ぼされてしまいます。それには理由があつて、イスラエルの民が神にそむいて、別の神々を拝み、人の知恵や力に寄り頼もうとしたからでした。いまなら「自業自得である」とか「自己責任だ」と言われておしまいでしょう。ところが神はそこで終わらせない。預言者マラキを通して約束される。救い主が来られる前にまず主の道を備える者が遣わされ、それから救い主が来られる。だからあなたがたはどんなときにも待ち望みなさいと言われる。これが救い主を待ち望むクリスマスの意味です。

先週は、御使いガブリエルが祭司ザカリヤのところに現れ、これから生まれるヨハネこそマラキが語った先に遣わされる者であることを告げたところを見ました。きょうはその続きで、ガブリエルが今度はマリアという若い女性のところに現れたときのことを見てまいります。

1 御使いガブリエル

1) おめでとう、恵まれた方

御使いガブリエルは、今度はナザレに住むマリアの所に現れ、このように切り出します。28節。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

神から恵みや祝福をいただきたいと誰もが願っています。あるいは、主が私といっしょにおられるという確信がなかなか持てないと言う方もいます。そういう人たちから見れば、「主があなたとともにおられる」とはつきりと約束してもらったマリアがうらやましいと思うかもしれません。

2) 男の子を産む

でもほんとうに手放しで喜べるのでしょうか。天使は31節でこう告げています。「見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」これは、夫となるヨセフと結婚した後の話ではありません。ヨセフと結婚する前のことです。今の時代ならば、「できちゃった

婚」ということで笑って済まず話かも知れませんが、二千年前のイスラエルは違います。マタイの福音書には、ヨセフがマリアから妊娠を知らされたとき、婚約解消を真剣に考えていたことが書かれています。仮に婚約を解消していたらどうなるか。ヨセフはやり直してきたでしょう。でもマリアは一生日陰者です。だれが父親か分からない子供を産んで育てていかなければならない。冷たい視線にさらされながら恥を背負ったまま生きていかなければならない。自分はいったいどうなるのか。そう考えると目の前が真っ暗になります。

3) 父ダビデの王位を与える

天使ガブリエルは、そんなマリアを気にかけるふうでもなく、どんどん話を続けます。32節。「その子は大きいなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。」

御使いが、「父ダビデの王位」ということばをどうして持ちだしてくるのか不思議に思うかもしれませんが。それには理由があります。

紀元前千年頃に活躍したダビデは国を一つにまとめ、エルサレムに自分の家を建てたときのことです。彼はふと思った。主の契約の箱は天幕の中に置かれているのに、自分だけ立派な家に住むのはどうなのか。神殿を建てるべきではないか。そう考えた。そこで彼は預言者ナタンに聞きに行く。そうしたら、ナタンに主から次のようなことばがありました。「(ダビデが主のために家を建てるのではなく)あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(第二サムエル7章12、13節)神がダビデの子孫から救い主を送るとはつきり約束している箇所として、ユダヤ人なら誰もが知っている有名なフレーズです。御使いは、この約束をいまマリアを通して神が果たそうとしておられると告げたのでした。

2 ひどく戸惑うマリア

1) ザカリヤの場合

さてこれを聞いていたマリアはどう反応したか。前回見た祭司ザカリヤのことと比べてみましょう。

御使いがザカリヤに、やがてあなたの妻エリサベツが男の子とを産むと語ったとき、ザカリヤはこうのように言いました。「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。このわたしは年寄りですし、妻ももう年をとっています。」

ザカリヤはなにか変なことを言ったのでしょうか。いや、言っていない。むしろ常識から外れたことを語っているのは御使いのほうです。ザカリヤは誰もが感じる疑問を口にただけでした。ところが、御使いから「あなたは信じなかった」からという理由で口がきけなくされ、耳も聞こえなくされてしまいます。それは罰というのではなくて、ザカリヤが救い主を待ち望むための静まりの時間になっていったということを知りました。

2) どうしてそのようなことが起こるのでしょう

さて、マリアはどう反応したか。34節。「どうしてそのようなことが起こるのでしょう。私は男の人を知りませんのに。」まだ結婚もしていないし、男の人を知らないのに、どうして妊娠するのだろうか。マリアは、ザカリヤと同じように、そんなことはありえないでしょうと正直に答えました。さあ、ここで考えるわけです。私たちはすでにザカリヤが口がきけなくなったことを知っていますから、マリアにも何か起きるのではないかと予想するわけです。ところがマリアにはそういうことはいっさい起こらない。どうしてでしょう。ガブリエルの語ることを聞いて、全部素直に疑わずに信じた。だからなにもおとがめを受けなかった。本当にそうでしょうか。

3) 不安

ユダヤ人の中では、女性はいまの中学生くらいの年齢になると婚約をするのが習慣だったそうです。そうするとマリアはまだ子どもなので、聞いてもよく分からなかったということなのか。そうではないでしょう。それは皆さんもよくご存じのはずです。

マリアもいろいろなことを考えます。ヨセフには今のことを正直に伝えなければならない。そのことをまず考えた。でも冷静に受けとめてくれるだろうか。他の男性と関係を持ったと誤解され、責められるかもしれない。もしそうなれば、姦通の罪を犯したことになる石で打たれて殺されるでしょう。今自分は、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされている。そう思うと非常に恐ろしい。

3 告白するマリア

1) エリサベツ

マリアはそれでも小さな身体で御使いが語ることを一生懸命受けとめようとします。でもわからないことだらけです。そこで御使いは、親類のエリサベツのことを36節で語って励ますのですが、そのなかに「あの人もあの年になって男の子を宿しています」とあることに注意してください。

いまなら産まれる前から、赤ちゃんが男の子か女の子かわかります。でも昔は違います。産まれてくるまで分からない。それなのに御使いはエリサベツが男の子を宿していると断言する。こう言えるのは二種類の人しかいない。一人は詐欺師。もう一人は神もしくは神から使わされた者。でも詐欺師ならば嘘がばれるようなことは絶対言いません。赤ちゃんが男か女か性別には触れないはずで、ところが目の前に立っている不思議な人は、「男の子を宿している」と言い切るのです。

2) 私は主のはしためです

その御使いがこう語ります。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」そして37節。「神にとって不可能なことは何もありません。」

細かな事は理解できなかったとしても、たった一つ分かることがありました。これはパテン師の話ではない。自分が今聞いているのは、神のことばである。なぜそのように受けとめられたのか。答は御使いが言っています。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」マリアが自分の力で理解したのではない。すでに聖霊がマリアをとらえています。聖霊の励ましを受けながら、御使いのことばを神のことばとして受けとめていきます。

そんなとき人は何を言うのでしょうか。「私は恵まれた幸せな人間です。神さま、感謝します」とは言わない。マリアはなんと叫んだか。「ご覧ください。私は主のはしためです。」「私は神の前に立つことのできない罪人です」と言うのです。どうしてこう言えたのか。

神のみわざはまったく不思議です。神が直接この世に来られ、救いのみわざを成し遂げてくださればいいはずで、ところが神はそのような方法とはられない。人とならなければならない。そう考える。まるで着ぐるみを着るようにして人と似た格好をするということではない。実際に、人の身体とおして、それもこんな自分を通して、赤ちゃんの姿となって私たちのところへ来ようとされる。そ

のような神のご計画が光に照らされるようにして見えてくると、自分の罪も鮮やかに見えてきました。

3) この身になりますように

そしてこう続けて言います。「どうぞ、あなたのことばのとおり、この身になりますように。」ヨセフがどのように受けとめるのか、分からない。もしかして自分は死ぬことになるかも知れない。それでも、すべて神にゆだねると決心します。

もう人並み人生を歩むことはできません。神のご計画ならばそれでもよいと、自分を差し出します。実際にマリアはやがて十字架の前に立たなければならないときが来ます。自分の息子が目の前でむごたらしい姿となって殺されていくのを見なければなりません。母として胸が張り裂けるほどのつらい経験です。御使いは「おめでとう、恵まれた方」と言っただけで、まるで悪い冗談かとさえ皮肉を言いたくなります。

でも、ナザレに住むひとりの女性であったマリアが、迷いながらも聖霊の励ましを受けて神のことばを受けとめようとします。ザカリヤは口がきけなくされるという身体の変化をとおして救い主を待ち望む信仰を与えられていきました。マリアは、自分のお腹が少しずつ大きくなっていくのを見ながら、救い主が来らることを待ち望む信仰へと整えられていきます。

思い悩むマリアを励まししながら、人となって来られた主イエスの御名をあがめます。